
黒白の境

木波 榛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒白の境

【Nコード】

N4660E

【作者名】

木波 榛

【あらすじ】

魔王と呼ばれた者は封じられ平和となった世界。少年は都近くの森で祖父と2人きりで暮らしていた。日々はただ優しく穏やかで少年はそれに不満もない。けれども、世界が再び暗雲に閉ざされようとしている事を少年は未だ知らない……。

第1話

老師には孫息子がいるとは、以前に聞いたことがあった。

老師の住む森の庵の戸を叩いて現れた少年はだからその孫息子だろう。

首の後ろで軽く一つに括られた腰ほどまである銀の髪と、夜明けの空のような青紫の瞳の、何処か性別を窺わせない容姿の少年。やや華奢に見える体付きは、確か15歳と聞いたまだ体の出来上がってない年からすれば当然といえるものだろう。その肢体はだが細いなりに鍛えられているものであることが遠目にも知れた。何気ない立ち居振る舞いの中にも、どことなく剣士のそれが見え隠れしている。王城で熟練の剣士を間近にしている目に、その腕は年齢に不相応にも見えた。

突然の来訪者にどこか訝しげに眉を寄せている少年に彼女はにっこりと微笑んだ。

「先触れもなくごめんなさい。老師はいらっしゃる？」

「老師？」

「フラウ老の事よ。ここ、イサ・フラウ老師の庵でしょ？」

「ああ、じい様のことか。……老師なんて言うからなんかどこかの立派な人かと思った」

「どこかのって……」

心底驚いている様子の少年に彼女は軽く首を傾げた。

祖父が城の者達からは老師と呼ばれ慕われていることを、この孫は知らないのだろうか？

「まあ、それはともかく」

独り言のように呟いて気を取り直す。

「私は、王城付き魔術士、イリア・ハルミヤ。老師にお取次ぎ願える?」

「城の?」

「そう。ちよつと急ぎの用なんだけど」

「でも、じい様は――祖父は今、外に出てるから。用件だけ言付かっておこうか?」

「それは……困ったわね。用件というか老師に直接用があるから」「わしにか?」

声の一つ増えた。

老師が不在と聞いて頭を悩ませていたイリアは、覚えのあるその声に振り向いた。そこには、予想したとおりの小柄な老人が立っていた。髪は見事な白髪で、口元も同じ白い髭で隠れている。高齢で杖を片手にしているが、足腰は丈夫な彼の姿勢は良い。背はしゃんと伸ばして立ち足取りも軽く歩いてくる。

隣で、少年が拍子抜けしたような声でじい様と呟く。

「おかえりなさい。早かったな」

「ただいま、シン。珍しいお客人が来ているようだの」

「あら。そんな珍しいですか?」

大げさなほどおどけたようにしてみせる師にイリアはわざとらしく肩を竦めてみせた。

もつとも、イリアが直にこの庵まで訪ねてくるのは今日が最初だというのは事実だが。

「老師が丁度良く帰ってきて下さって助かりました。先ずはこちらを」

「それは受け取らんでも、お前さんが来る辺りで用件は分かつとるよ」

さすが老師と、イリアは胸中で呟く。なら、話も早い。

「でしたら、老師」

「シン」

だが、フラウは何故か孫息子の名を呼んだ。唐突ともいえるそれに、一瞬、イリアの思考は止まった。

全てを承知している風のフラウは、その言葉通り差し出した書簡を受け取る素振りすら見せない。それだけならまだしもどうしてここでこちらの話を遮ってまで孫を呼ぶのだろう。呼ばれた方は、当然のように首を傾げている。けれど、それ以上にイリアは首を捻らせた。師の意図するところが、まるで掴めない。

2人はけれど続いた言葉に、更に驚愕した。

「イリアを城まで送って行ってやりなさい」

脈絡など全くない。話もまだ終わってない。イリアの驚きはそれを通り越し苛立ちに近くなった。

「老師！ 分かっていると言いながらそれは何ですか！」

「じい様、何で俺が？」

「どうも1人で来たらしいからの。イリアは魔術を使えるが、近頃は何かと物騒だしの中」

「んー……分かった。剣取ってくる」

釈然としない様子ながらもシンは頷くと庵の奥に行った。言ったとおり剣を取りに行ったのだろう。

勝手に話をまとめられたイリアは半ば呆然とその背を見送った。次いで、非難めいた視線を師へと投げつける。本当に何故、全て承知しているがそれに逆らうような真似ばかりするのだろう。今はもう一刻の猶予もないものと同然だろうに。

「お前さんの言いたいことも分かつとるよ」

口を開きかければそれを制するように言われた。

「だが、今日のところは帰ってもらえんか」

「今日のところもでしょう。再三、要請は届いているはずですもの。お孫さんは知らないようですけど」

「なかなかそれは話す機会がなくての。……後日、わしから出向くことだけお伝えしてくれ」

「……………分かりましたよ」

師にそう言われては引き下がるしかない。

確約ではないが了承を得たということで、イリアはここは一先ず大人しく帰ることに決めた。

ややすると剣を携えたシンが再び戸口に現れた。

「待たせてすまない。行こうか」

「いいわよ。別に送ってもらわなきゃいけないほどか弱くもなしね」

「うん。全然そう見えない」

「シン。そういうことはそうだとしても頷いてはならんところだぞ」

「老師。全く擁護にもなってません」

自分で言い出したことだがやはり否定してほしいところでもある。あっさり肯定されると多少気は沈む。

尤も、言い合うほどのことでもない。

咳払い一つしてから師に一礼すると、イリアは踵を返した。シンがその後に続いてくる。

「気をつけてな」

すぐ後ろで手を振るフラウの声はけれど2人にはどこか遠くに聞こえた。

第1話（後書き）

見切り発進大得意の作者です。話がどう転がるかは上の主人公達次第。これからどうなるのかも闇の中。そんなお話ですが、お読み下さった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660e/>

黒白の境

2010年10月13日18時50分発行